

みんなで作るシナリオのないドラマ ～ “劇場化” する教室。～

平井良信

はじめに

本授業研究は、絵本「あなたへ」を活用した授業を通して、生きる力に繋がる「自分を内省する力、自己理解力、他者を認める力、他者理解力」に着目し、教材、教師、児童の相互関係の中から浮かび上がってくる児童の自他理解の様子がどう変化するかをみたものである。2年目の今年は3年生で、ギャングエイジ（注1）とよばれる世代である。今回の観察に関して、わたしにとって際立つ子どももなく、クラス全体としてしか受け止めることが出来なかったが、活発に発言し合う教室で起こったことを中心に考察を加える。

授業は予定調和では無く、何が起るか分からないというライブパフォーマンスである。そこには刺激的な「学び合い」の世界がある。もちろん子ども同士だけではなく教師も含まれる。さらに言えば今回はその時空間にいた我々も否応なく巻き込まれたのであろう。

教室では予め教師によって作成された指導案というシナリオがあり、演出家という教師がいるが、リハーサル無しのぶっつけ本番の舞台では、子どもという役者たちがアドリブの台詞で進行する。それを修正しようとする教師。迷走しながら、時にはぶつかり合いながら。

そして、遂にシナリオのないドラマはクライマックスへ向かって行く。

担任教師と子どもたちの関係

始めから良い雰囲気の良い教室であると感じた。活発な発言が相次ぎ元気の良い子どもたちである。その活発な発言は、時として不規則発言と捉えられなくもない。（候ら 2007P139）しかし、次々に発言が続きその発言のポイントで担任教師が絶妙なタイミングで入ってきてその言葉を拾い上げる。つまりスポットを当て、新しい展開に持っていく。繋いでいく。その自由な発言を許す雰囲気を担任教師が作っているとも言えるであろう。また、子どもたちと担任教師の良好な関係が成り立っているという前提でもある。つまり学級作りに成功しているであろう。

その担任教師の言動の一端を紹介しよう。

- ・（静かにしなさいと何回か注意した後）注意している時間がもったいないぞ！＜みんなで共有する時間の重要性に気づきを与える：気づき＞
- ・（人の意見を聞いていなかった子どもを叱ったあと）
あとで、もう一度チャンスやるから（少ししてまた、その子どもを当てて意見を言わせる）＜その子どもの名誉を挽回し、自信を持たせる＞
- ・下敷きで仰ぐのを1分許す。55秒からカウントダウン。＜規範の明確化：気づき＞
- ・子どもが質問の内容を取り違えた発言をすると＜全否定せず、みんなに意見を求めるかたちで是正を促す：気づき＞

・他の人のものをみることを許す<他者の作品をみることでしあわせを知ることができ、他者理解に繋がる：気づき>

・私語を止めさせるために指名する。叱るのではなく発言させることで注意を喚起する。

<方法論の多様化>

・遅刻した者に黙って入らずにクラスで決めたルールに従って教室に入るように指示する

<規範の定着化>

・「うれしい」のはじめに、どんなときにうれしいですか？と子どもに問いかけた。しかし、まず自の体験を披露する。それは、彼女にプロポーズして「はい」の返事を貰ったときであると赤面しながら話して、子どもからやんやの喝采を受けていた。<思考への誘い、身近な体験への気づき>

これらはすべて子どもの気持ちを大切にしながら彼ら自身に気づかせる演出を施すことで、納得と自信を持たせている。厳しくともやさしくしっかりとした哲学に基づいた指導方針がある。また積極的に子どもたちを授業に参加させるという方針を持つ。ただ、ここにたどり着くまでの1学期には折りにつけ叱責する担任教師の大声が何度も飛び交っていたこともここに記しておく。

「あなたへ」シリーズは自己理解から他者理解へ、究極的には「連帯・協働・異質への理解を深める」ことが目的とされたテキストと絵で成り立っている。確かにこの絵本の短かく洗練された言葉と表現力豊かな力強いイラストは、大人や子どもにも関わらず自由な想像力を喚起させるものである。また、一種の哲学書といっても過言ではないであろう。

D5	しあわせのときに、とっもしあわせがあったことをたくさんおもいだした。自分はとっもしじぶんのしっぱいなどがあったことがあった。ともだちは友だちに、いろんなことをしてもらったことがあった。わたしのせいじゃないは、本がとっもしじわるな人がいるんだなと思った。うれしいは、まいにちがうれしい。
C4	しあわせ、じぶん、ともだち、うれしい、かなしいこともあってうれしいこともあるんだな
D3	わたしは、いろんな人のせいかわかりました。自分では、自分のからだにはいろいろなやくだつところがあるんだなあと思いました。もっといろんな人のことをしりたいです。
E2	2学期からしていろいろのことを思った。ときにはおこった気持ちになったりうれしい気持ちになったりふしぎな本だった。
C1	『あなたへ』シリーズはすきでした。道とくもすきでした。だからきんちょうしなかったし、楽しかった。またしたいし、またきてほしい。おもしろかった。
D10	2学期の9月からずっと勉強してきて自分のうれしいはこんなにあったんだとか、友だちのうれしいこともこんなことがうれしいんだなとわかってよかったと思います。
D11	わたしは、クラスのうれしいがわかりました。<略> もっともっと色々な本を見たかったし読みたかった。また3年生にもどって本を見たり読みたいです。

表1

表1は、全ての授業が終わったあと、再度担任教師が使用した絵本「しあわせ」「じぶん」「ともだち」「わたしのせいじゃない」「しあわせ」を読み聞かせた後に書かせた感想文である。十分に子どもたちに届いていることが分かるであろう。この絵本は、子どもから大

人まで読めるものであるが、それはその年齢に応じた鑑賞の方法があるからであろう。虚飾をそぎ落とされ尽くして洗練された言葉は、心にやさしく突き刺さり想像力を刺激し、その優雅でいまにも動き出しそうなイラストとの相乗効果で自由にイメージが膨らんでいく。また、読んでいくと繰り返されるリズムが心地よくその世界へ自然に誘われていき、いつのまにか時空間を超越して一体化されていくのである。(本稿 2007 P40) それはこの絵本が文字と静止画であるにも関わらず読者を短編のアニメ映画を見ているような錯覚に陥らせているからであろう。

今回の全ての授業において活発な発言が相次いだ。これは信頼関係を築いた学級作りの賜であろうが、また、担任教師の子どもたちを積極的に授業に参加させるという思いとこの教材が絡み合った結果、「学び合い」を成立させる一手法でもあるブレインストーミング状態を生み出すこととなった。ブレインストーミング(注2)とは思った意見を出し合うことによって種々の意見を抽出する技法で発想支援法のひとつである。つまりひとりの考えが他の考えと出会い第三の考えに結びつく。発想と発想がぶつかり合い連鎖するという意味ではあたかも核分裂のようである。イメージの喚起である。そしてイメージの連鎖。アイディアが反発しあい、結合し発展していく。その繰り返しの世界。私も仕事として企画をする段階でスタッフ間で使う手法であるが、言葉として発した自分自身の考えがみんなの意見と反発しながらも交わって変身していく様に驚愕させられる。そして拡散と収斂を繰り返し最終形になるときはみんなで作りあげたという充実感がある。いままでの自分という枠をみんなの力を借りて突破しつつ、進化し、深化し、真化し、そして定着するのである。真摯に学び合う姿がそこにある。



写真1 授業風景 活発に発言が相次ぐ(10月19日)

このことは良い結果を生み、担任教師が期待したこと以上に子どもの考えが動き、つまり子どもたちがいい形で裏切る時、担任教師が驚きを持って感動させられた。担任教師は何度もそのような体験をしたようである。

今回、自由闊達な子どもたちの発言を、2台のビデオカメラと担任教師にピンマイク付きのICレコーダーを仕込んで記録し後に全発言を書き起こしを行ったことで、繋がる言葉の一端がくっきり浮かび上がってきたのである。

それは7回目 11月21日のこと

10月から始まり、「しあわせ」「じぶん」「ともだち」「わたしのせいじゃない」「うれしい」と5冊の教材を使用した。

6回目の11月14日は「ともだち」の1回目である。(候ら2007 P55)自分にとって友達とは何かを考えさせる。ワークシートに友達の名前を具体的に書かせて「友達とはどんな人?」と問う。また絵本を朗読し、共感する場面を挙げさせ、そして友達は今のままだが いいのか増えた方がいいかを問いかけた。



写真2 授業風景(11月21日)

そして、21日は「ともだち」の2回目である。前回書いた友達の名前をベースにみんなに黒板に名前シールを貼らせる。当然、現在の友達関係が顕わになる。担任教師も名前シールを貼るのはかなり強引な力技であると感じていた。つまり、誰かが一人ぼっちになるかもしれないことは考えられるが、今のクラスは大丈夫だと思い採用したようである。担任教師は、「リスクはあるがこの方法で、友だち関係を広げたいというクラスの仲間の悩みを、学級全体で考えたい。ほかの子どもにも、同じように考える機会が訪れることもあるだろう。授業のねらいや絵本の主題から大きくはずれることはなく、むしろ本質にせまるものであると考えたので使うことにした。」と後に語っている。

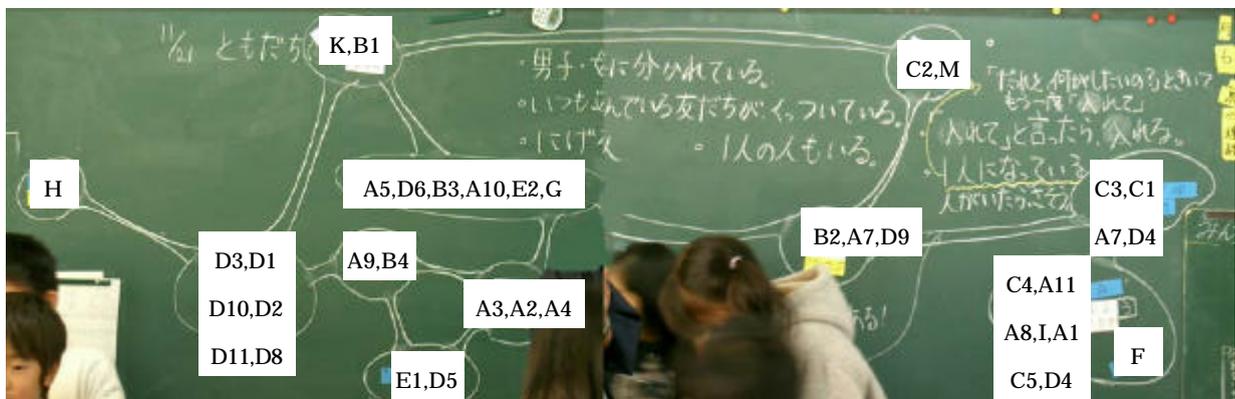


写真3 名前シールを仲のいい友達同士で黒板に貼らせる

結局 11 グループが出来た。担任教師は「みんな繋がって欲しい」と言って、それぞれのグループを丸で囲み線で結んだ。しばらくすると子どもたちから「つながってる、つながっ

てる。アリの巣みたい」「人の巣や」「友達の巣や」と発言が次から次から発せられた。その時に私は背筋がぞくとした。そこには昂揚した異空間が存在していた。クラス40名の思いと担任教師の思いが全て結実した形を見たような気がしたのである。

担任教師は黒板に貼った名前シールをそれぞれ囲んで繋いで見せたことは、偶然だったと後で吐露しているが、視覚化されたことで子どもたちの想像力をより刺激し、上記の発言に繋がったのであろう。また、「アリの巣」から「人の巣」そして「友達の巣」へと連鎖的な発言になったことで、担任教師が「みんな繋がって欲しい」と意図したことがクラス全体に確実に浸透したと思われる。

この展開の臨場感を少しでも味わってもらうため、前後の発言を掲載する。

T ; じゃあ、入れてって言われたら入れてあげられるような風に先生は育てて欲しいねん。
T ; 今はなあ同じグループでしか遊んでへん人、最初にA4さんが言ったようにこれがちょっとでも繋がって...いろんな人とでも遊べて繋がっていけて.....(丸を繋げる。)
不 ; それ、もう繋がってるで！
T : あっ、そうか。じゃあ、いいわ。
不 ; それ、もう繋がってるで！
T ; どんどん繋がっていったら...
C3 ; そんな手があったんか(つなげるのを見て)
T ; 男子も女子も関係なく...
C3 ; そのパイプ、むっちゃさあー
不 ; そのパイプってどこまでつなげるん？
K ; それ、アリの巣みたい。
T : どこまで繋がる？
不 ; ほんまや。
不 ; アリの巣みたいや。
T : こうやってなあー
I ; 人の巣や。
T : どんどんどん繋がる。
A8 ; 友達の巣や。
不 ; 友達の巣や。
M ; なんでD9とオレは繋がってん？
不 ; 友達の巣。
不 ; はあーなんで？
T : どんどんどん繋がる。
T : あっ、そうか上もか？
I ; 誰とでも繋がったらいい。
不 ; 先生、Mが言いたいことがあるらしい。
T ; ちょっと待ってなあ~

T ; M、何？

C 3 ; けど先生、結局は男と女は離れてるで。

不 ; 何でD 9 と繋がってんのとか言うてる。

不 ; 先生、今、C 2 がなあ、なんでD 9 とつながってんとか言うてる。

T ; あっ、ほんならつなげよかー

T : びゅーん。(繋げる)

T : 遠い？これがなあ近くなって近くなって...

不 ; 先生、いまなあ、D 9 と俺なんで繋がってんの？

T ; 繋がったら困る？

T : 困まらへん？

T ; 今、誰かが言ったやろ？男と女はそれでも遠いやんってそれでもどんどん近くなっていったら先生はいいなあって思うんや。

T : こういような時に友達との関係をちょっと考えてなあ変わっていけたらいいなあと先生は思います。

不 ; 先生、D 9 が何か言うてる。

T ; みんなはどう思いますか？D 9 君どう思う？

T : 何か思ってくれると嬉しいなあと思います。

T ; じゃあ、せっかく友達という教材を基に... C 1 いいか？友達というもう絵本を基にちょっとこのクラスの関係のことを考えてきました。もう一度、この絵本を先生が読み聞かせます。それを聞いて最後に感想を書いてください。 発言した児童が不明の場合不と記入した。

(注3) M、D9、C2「近所のスーパー前での事件」直後のことである。(本稿2007P12)

新たなるステージへ

表2は各授業後のワークシートや、全て終了した後の感想からのピックアップである。

A4	KがA4いじょうにこたえていたのがすごいと思った。A4もKいじょうに次回はがんばってこたえる。
K	今日はみんなのしあわせをよんで、いろんなことがわかりました。それでみんなほとんどしあわせがおんなじでした。
A10	しあわせはまねをするのじゃなくて、とりくんでいくのだと思いました。
A5	しあわせはなにかわかってうれしくてたまらない。しあわせはやりとげたり何かをやっているときにおきる。
A2	「しあわせ」とゆうのがとてもいいことばだとおもった。
E2	みんなの幸せはなになかったけど、みんなの幸せがわかってすごうれしです。にてるのもあったけどみんなすてきでした。
M	しあわせはじぶんがうまれてきて いまいきていること
A9	前の黒板がありがほったすみたいやった。すこしかんがえたところもあったけど、すぐにわかってよかったです。
A10	どうとくでとってもおもしろい「あなたへ」シリーズをよんでみんなのいけんがとってもよかった。

わたしのいえにもその本があったらな～と思いました。二文字せんせいとみなさんがとおくからみてくれてうれしかったです。

表 2

ここに他者との共感とともに学び合う姿が浮き彫りにされている。「次回はがんばってこたえる」「にてるのもあったけどみんなすてきでした」等々。他にも、「どうとくのじゅぎょうが好き。もっとやりたい」と何人も書いていた。それは、本当にいろんなことを自由に思い描いて発言したり、みんなの意見も聴くことが出来たことがうれしかったのではないだろうか。正しい解答があるわけではない授業なので、みんなは伸び伸び自由に発想できたこと、もちろん担任教師がそれを保障したことも大きい。

担任教師がリスクを背負ってでも挑戦するとき、子どもたちと共に緊張感を持って通り抜けていくときなにかが始まる。まさに 3 年 1 組の教室は、学び合う子どもたち、担任教師と子ども、みんなで作るシナリオのない感動的なドラマを生んだ劇場である。この一体感は何者にも代え難い体験であり、担任教師、子どもたちにも寄与することであろう。そして、彼らの中に鮮烈な記憶として永遠に留まるのであろう。

そして、彼らは新たなステージを目指す。

最後に担任教師自身の感想を披露する。よかったという想いととも授業の展開と友達関係のトラブルが複層することもあり、綱渡りのなところや苦勞も滲み出ている大変興味深いものである。

今回の授業シリーズ全体に関しては、教師からある価値観を教え込むのではなく、児童自身の経験や感じ方をふりかえり、改めて自分の考え方の特徴や、これからの生き方を考えること、また、同様に友だちの考え方や感じ方との同じ部分や差異に気づくようにするという目標があった。〈中略〉

身を削りながら作った授業に児童が反応し、考え、教師の考えを軽々と乗り越えていく姿を見ると、やってよかったなぁとも感じる。

もう一度やれと言われたら・・・そのとき考えることにする。

(藤永 2007)

注1) ギャングエイジ <gang age >

排他的な遊び仲間を求める児童期のことを指す。

幼児期の友人関係は、機会的で継続性がない。たまたま遊び場に居合わせれば友人であり、そこを離れれば友人関係は消滅する。しかし、学齢期に達すれば、友人関係は固定化し、継続性のあるものとなる。 < 出典: ウィキペディア (Wikipedia) >

注2)ブレインストーミング<brainstorming>

自由に意見を出し合い、あるテーマに関する多様な意見を抽出する技法のことである。質より量を重視し、お互いの意見に批判をせず、自由に意見を出し合うことで、周辺知識を列挙することができる。発想支援法のひとつで、集団思考とも訳される。また、課題抽出ともいう。<出典: ウィキペディア (Wikipedia)>

参考文献

- ・藤永泰成(2007)「あなたへ」授業研究シリーズを終えて～担任教師としての想いと変化していく経緯～(未公刊資料)
- ・侯夢霄、鄒立志、東泰弘(2007)『教師、教材、児童の相互関係にみる児童の自他理解 絵本「あなたへ」を使用した授業研究その2』